

高齢者地域で暮らすには

住民、学生が支援策探る

八戸

八戸市は本年度から、高齢者が住み慣れた地域で生活を続けられる体制をつくるため、住民と学生が話し合うワークショップを始めました。初回の23日は市の調査で浮かび上がった、高齢者が配食などの支援サービスを知らず十分に活用できていないという課題を解決するため意見交換。参加者は異なる世代の考え方に触れ、刺激を受けた。市は今後も各地でワークショップを実施する方針。

同日は同市の八戸ポータ

ルミュージアム「はっち」を会場に、八戸学院大学の学生と、小中野、白銀両地区の住民ら約40人が参加した。ワークショップに先立ち、八戸学院大学の小柳達也講師が、高齢者特別バス乗車証利用者を「比較的自立した生活を送っている高齢者」と捉え、2016年度に行った調査の結果を説明。見守りや配食など、高齢者の生活を支援する「社会資源」の認知度が低いことを課題に挙げ、「サービスを知っていれば、(施設に入所せず)住み慣れた場所での暮らしを継続できる可



高齢者が住み慣れた地域で暮らし続けるための方策について話し合う住民と学生

能性がある」と解説した。この後、学生と住民は支援サービスの利用率向上や充実に向けて何ができるか、5班に分かれ討論。「町

内会の祭りでサービスを広報する」「どんなサービスを必要としているか、高齢者自身がアピールすることが必要」などの案をまとめ

発表した。

支援サービスの情報を集めるためのパソコン教室を地域で開き、地域の交流の場にする」との案を、班を代表して発表した同大学2年の山本光美さんは「高齢者の方はすぐたくさんのことを不便に思っていることを知り驚きました。学生がパソコンを教えて話し相手になることで、気持ちが悪くなることもあるかもしれない」と話した。

白銀地区社会福祉協議会の新谷範由会長は「学生は現場の声を知る機会が少ない。今回のような機会を通じて勉強して、福祉を担う人材として育ててほしい」と期待を寄せた。

(新村菜穂)